国立国語研究所学術情報リポジトリ

現代日本語の文字・表記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹原, 宏之, 小沼, 悦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003305

現代日本語の文字・表記

言語体系研究部第三研究室
笹原宏之・小沼　悦

要旨

国立国語研究所言語体系研究部第三研究室では、1994年度に刊行された月刊雑誌を対象に、標本抽出に基づく用字・表記の大量調査と、それに対する研究を実施している。また、日本語の名詞の一角を占める固有名詞の用字・表記について、笹原は科学研究費により日本全国の地名の全数調査とスカウト式用例採集調査に基づく研究も行っている。それらの概要をまとめておく。

キーワード

月刊雑誌　漢字　用字　固有名詞　地名

1　はじめに

国立国語研究所では、現代日本で使用されている文字（用字）と、文字による言葉の書き表し方（表記）の実態について、さまざまな調査研究を行ってきた。とくに雑誌に関しては調査研究の数が多く(注1)、中でも大規模かつ幅広い雑誌を対象としたものとして「現代雑誌九十種」に関する一連の調査研究がある。これは、1956年度に発行された雑誌９０種に対する標本抽出（サンプリング）調査とそれに基づく分析であった。この雑誌調査は、「当用漢字表」の時代のものであり、その「当用漢字表」が1981年に「常用漢字表」に変わり、その性質も漢字制限色の濃いものから「目安」へと移り、字数も増加したにもかかわらず、その後の雑誌に対しては精密な実態調査がなかった。また、雑誌に掲載される記事の原稿がワープロやパソコンで書かれるようになり、マスメディア、とりわけ雑誌の印刷方法もコンピューターを駆使したものとなっており、そうした機器の国語に与える影響を追跡することが求められている。

２０世紀が終わろうとし、２１世紀を迎えようとしている現在において、社会の急激な変動とともに激変した戦後の書きことばというものを総括しておく必要があるが、その大規模な実態調査が存在しない。そこで、言語体系研究部第三研究室では、現在、特別推進研究として、1994年度に発行された月刊雑誌について、1956年度の雑誌調査と同規模の用字調査を進め、試行的な研究を開始している。これは、現在、サンプル箇所の確定と校正、「〓」箇所の確認、異体字・記号類の扱いの検討などが完了していない段階のデータであるため、以下の数値は暫定的なものであるが、大まかな傾向は見て取れると考えられるので、1956年度の雑誌と比較しながら、現代日本の雑誌における文字・表記について概観していく。

また、笹原は、文部省科学研究費奨励研究(A)による「日本全国における小地名使用漢字に関する調査研究」も行っている。これは、現代日本語の一角を占める固有名詞の文字・表記の実態を探究するものであり、末尾に付記する。

2　雑誌における漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字比率の推移

2．1　雑誌そのものの変化

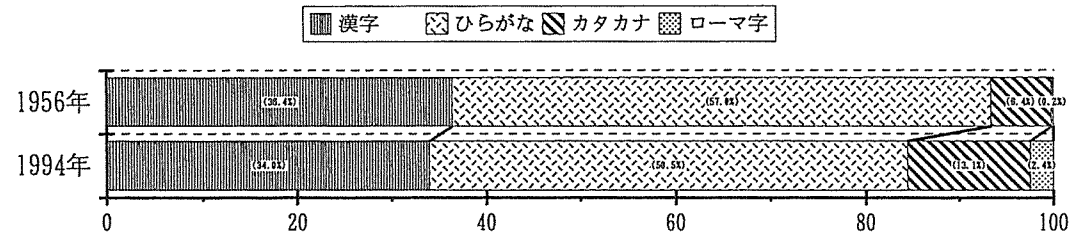
1956年度の雑誌と、1994年度の雑誌とでは、同じ題名の雑誌を見ても、誌面の構成・内容自体が相当異なっている。下にその傾向を示す。

1956年		1994年
□ 誌面が小さい	→	誌面が広がった
□ 白黒である	→	カラーが増えた
□ 文字が多い	→	写真や挿し絵が増えた
□ 縦書きが多い	→	横書きが増えた
□ 明朝体活字で印刷されている	→	ゴシック体やデザイン文字が増えた

2．2　雑誌における文字体系の動態

現代の日本では、日本語を表記するために、実にさまざまな文字体系を使用している。具体的には、表語文字である漢字のほかに、表音文字として平仮名と片仮名、さらにローマ字までも使うことがある。これは世界でも例のないこととして注目できる。それでは、雑誌で使用されている文字体系にはいかなるものがあるのか。

一般に、戦後、「当用漢字」などの影響もあり、「漢字離れ」が進んできたといわれている。安本美典氏は1963年に発表した「漢字の将来」という論文において、1900年から1954年までの小説文を調査し、漢字は２１世紀には日本で使われなくなる可能性もあることを予測しているが、実際にはどうであろうか。漢字は直線的に減少し続けて、いずれ日本語表記においてなくなるのだろうか？　数多くの雑誌を比較するならば、３８年間で２～３％程度しか減少していないことが分かる。



資料：1956年―『国立国語研究所年報』11(1960)
1994年―笹原・小沼「途中経過」(1998)

上表のように、漢字はあまり減っていないが、カタカナは倍増している。これは、カタカナ表記語の増加を意味しており、とりわけ外来語を用いることが増えたことが要因となっていると思われる。

また、ローマ字は１０倍に増えた。これは、雑誌において、横書きが増加し、原語綴り

を印刷しやすくなったことも関連しているといえる。この中には、日本語のローマ字表記や「A型」のように日本語になった外来語があることはもちろんだが、英語などがそのまま外国語として使われているケースも含まれている。このほか、ロシア文字も、ロシア語の原語の引用に現れている。

このほかにも、「プラスα」「βカロチン」などのようにギリシャ文字を用いたり、「2か月」のようにアラビア数字、「提言II」のようにローマ数字を用いることもある。これらの詳細は、今後の表記面の調査によって、より具体的に明らかになるはずである。

また、上の表からは除いてあるが、符号（記号）類の使用もさまざまな工夫がなされており、中国系の「。」「、」（句読点）のほかに、欧米系の「！」（感嘆符）「？」（疑問符）、さらには日本独自の「○×（まるばつ）」「☆（星印）」「♡（ハートマーク）」「💧（涙・汗マーク）」なども見られる。

3　雑誌における使用漢字の種類

1994年度の雑誌は、同じ雑誌という媒体ではあるものの、制限色の濃かった「当用漢字表」の時代の1956年度の雑誌と比べて、印刷技術の変化や、「常用漢字表」の公布、ワープロ・パソコンのJIS漢字の普及などの影響は見られるのであろうか。つまり、常用漢字表追加字(95字)、常用漢字表外字の使用は、増加しているのか。安本美典氏の「漢字の将来」の予測はこれらの変化については想定していなかったものであり、それに対する追跡と検証の一例となるであろう。

先に見たように、雑誌においては、３８年の間に漢字の比率はあまり減少していなかった。これは一般の感覚とは一致しないかもしれない。一般に、昔は難しい漢字をたくさん使っていたという印象がある。それでは、現代の雑誌は難しい字を使わなくなったということなのであろうか。音訓用法などの細かい分析は追って行われるが、雑誌で使用されている漢字の字種はどのくらい変化しているのか。ここで、使用されている漢字の種類（異なり）の数値を挙げてみる。

			資料
1956年	３５０５種	（延べ４２万字）	：『国立国語研究所報告』22(1963)
1994年	３５５０種	（延べ４２万字）	：笹原・小沼「途中経過」(1998)

このように、漢字の種類は、ほとんど変わらないか、むしろ微増しているのである。

4　雑誌における漢字の字体の変遷

漢字の形は、どのように変わったのであろうか？　当用漢字（後に常用漢字）表内字と、当用漢字（後に常用漢字）表外字とに分けて概観する。

4．1　当用漢字（常用漢字）の表内字

戦後間もなく、「当用漢字表」が制定され、その中の字体も新しくなったものがある。例えば、「國」という字は、戦前にほぼ手書きに限って使われていた「国」が当用漢字の「新字体」として公認された。その結果、「國」は「旧字体」と呼ばれることとなった。「当用漢字表」は、1981年に「常用漢字表」に変わったが、字体は基本的に踏襲されている。

1956年度の雑誌では、当用漢字で定められた新字体を使用している雑誌と、新字体と旧

字体を混用している雑誌、さらにはまったく旧字体しか使っていない雑誌があった。これは、戦後の文字生活と印刷事情を反映するものとして注目されるが、1994年度の雑誌では、引用部分や固有名詞を除くと、ほとんどすべての雑誌が新字体を用いるようになっている。

下に、「隠」という字を例に挙げておく。「隠」は、旧字体「隱」の新字体であり、1956年度の雑誌には両方とも使われているほか、両方の字体が混ざった、どちらでもない字体（誤字体・異体字）も出現していた。1956年当時は、漢字の字体がまだ一定しておらず、字体が一つに収れんし、定着するまでの過渡期にあったことがうかがえる。

	旧字体(正字体)	新字体	誤字・異体字
1956年	隱	隠	隱
	『週刊新潮』	『読切倶楽部』	『婦人公論』
		↓	
1994年		隠	
		『現代』	

４．２　当用漢字（常用漢字）の表外字

「当用漢字表」には1850字、「常用漢字表」には1945字が収録されていて、その字体もそこに示されている。しかし、それらの表に載っていない漢字については、字体に揺れが見られることがある。

例えば、「摑（つか）む」の「摑」は表外字であり、『康熙字典』や一般の漢和辞典や学校の教科書、多くの書籍などでは「摑」という形で使われている。しかし、「國」が「国」に変わったのだからと、「摑」にもその方法を拡張して生み出した「掴」という字体（拡張新字体）が、一部の新聞、書籍やワープロ文書などに使用されてきた。これは、戦前から手書きの場面では用いられていた字体であるが、雑誌ではほとんど現れなくなっていることが分かる。雑誌では、文部省の国語審議会や通産省の日本工業規格（ＪＩＳ）などで議論されている漢字「鷗」「摑」などの字体はどのようになっているのかというと、雑誌協会が1977年に主張したとおり、大筋ではいわゆる「正字体」（康熙字典体、旧字体）が用いられるようになってきていることが分かる。

	正字体	拡張新字体
1956年	摑	掴
	『映画ファン』	『講談倶楽部』
	↓	
1994年	摑	
	『ｗｉｔｈ』	

このように、雑誌における漢字の多様な字体は、終戦直後に比べると、概して収束の方向へ向かっているものと考えられる。

資料：笹原「戦後の雑誌における漢字の字体の変遷（中間報告）」

5　固有名詞に使用されている漢字

日本には、全国で延べ1000万件にものぼる地名があるといわれている。また、日本人の姓（名字）は、世界の中でも種類が極めて豊富であり10万種をはるかに超え、読み方も難しいものが多いが、そのほとんどが地名、とくに狭い地区に与えられた字（あざ）に由来するものである。広い地域に付けられている県名、町名なども、実は元は字（あざ）であったというケースも多い。したがって、字（あざ）、つまり大字（おおあざ）・小字（こあざ）や通称と呼ばれる小地名を把握することにより、日本語の名詞の一角を占める固有名詞の主要部分を把握することになる。

しかし、それらを網羅的に扱った調査研究はいまだなされていない。そこで、いくつかの資料を基に、資料を整備し、その全数に対する調査とスカウト式用例採集とを行い、その全体像に近づくための研究を進めている。

なお、小地名は、普通の地図には現れないほど細かいものが多い。逆にいうと、地図にも載らない小地名、つまり小字・通称の類はたくさんある。ここに、地図における地名の出現のしかたを例示しておく。

	都道府県 市区町村 大字 小字	小字地名の数
日本地図	静岡県	0
↓	・・・	
静岡県地図	静岡県 下田市	0
↓	・・・	
「二万五千分一地形図」		
（1978年 国土地理院）	静岡県 下田市 相玉	0
↓	・・・	
『土地宝典』		
（1989年 帝国地図）	静岡県 下田市 相玉 就地	62
	徳ノ窪	
↓	・・・	
「旧公図」（土橋一徳氏「小字位置図」28）		74

これらの地名に対する具体的な調査研究の内容について記しておくと、

「畔」「畦」の方言と地名訓

「町」「村」の読み方の地域差

「雪」を構成要素に含む国字を用いた小地名の歴史と分布

などを後ろに示した文献において発表した。そのほか、採集した結果に基づいて、

小地名にのみ出現する国字（方言文字・地域文字）の全容

「谷」の読みの地域差とその歴史

「狸」の読みの地域差とその背景

「はざま」の表記の歴史と地域差

などのことがらについて順次発表していく。

注

1　国立国語研究所報告として、『婦人雑誌の用語』(1953)、『総合雑誌の用語』(1957・1958)、『総合雑誌の用字』(1960)、『現代雑誌九十種の用語用字』総記および語彙表・漢字表・分析(1962～1964)、『雑誌用語の変遷』(1987)などがある。

文献

石井久雄(1990)「『中央公論』1986年の用語」(『国立国語研究所報告101　研究報告集11』)

――――(1997)「現代雑誌の用字　調査速報」

――――(1998)「日本の文字・表記における現代と歴史との断絶」(国立国語研究所文字・表記研究会配布資料)

梶原滉太郎(1982)「新聞の漢字含有率の変遷　―明治・大正・昭和を通じて―」(『国立国語研究所報告71　研究報告集3』)

国立国語研究所(1971)『現代新聞の漢字調査(中間報告)』(『国立国語研究所資料集8』)

――――――――(1976)『現代新聞の漢字』(『国立国語研究所報告56』)

――――――――(1983)『現代表記のゆれ』(『国立国語研究所報告75』)

――――――――(1987)『雑誌用語の変遷』(『国立国語研究所報告89』)

佐竹秀雄(1982)「各種文章の字種比率」(『国立国語研究所報告71　研究報告集3』)

芝野耕司(1997)『ＪＩＳ漢字字典』((財)日本規格協会)

土屋信一(1967)「雑誌「太陽」の用字の変遷」(『言語生活』10月号)

中野洋・中川美和(1997)「雑誌三種の表紙における文字使用の変化」(『日本語科学』2)

林大ほか(1982)『図説日本語』

宮島達夫(1988)「「漢字の将来」その後」(『言語生活』3月号)

安本美典(1963)「漢字の将来　―漢字の余命はあと二百三十年か―」(『言語生活』2月号)

横山詔一・笹原宏之・野崎浩成・エリク-ロング(1998)『新聞電子メディアの漢字　朝日新聞CD-ROMによる漢字頻度表』(国立国語研究所プロジェクト選書1　三省堂)

笹原宏之・小沼悦(1998)「戦後の雑誌における文字体系・漢字字種の変遷(中間報告)」

笹原宏之(1997)「文字から見た日本語らしさ」(『日本語学』7月　23～34頁)

――――(1998)「「町」と「村」の読み方・読み分け」(『日本医事新報』3867号)

――――(1998)「戦後の雑誌における漢字の字体の変遷(中間報告)」

――――(1998)「地名表記漢字の方言資料としての可能性」(国立国語研究所文字・表記研究会配布資料)